

第4回中間報告

(報告期間: 2022/7/1 – 2022/9/12)

国際ロータリー第2710地区

2021-22年度地区補助金奨学生

ジェイムズ常マシュー

報告書提出日: 2022/9/16

派遣ロータリークラブ: 広島中央ロータリークラブ

カウンセラー: 西川済様

留学機関: University of York

専攻: MA English Literary Studies

1. 現在の学習状況

約 2/3 週間ごとに指導教官である Dr Bryan Radley から僕の草稿にフィードバックを頂いてはアイデアを練り直し、修正を加え、新たにリサーチを加えることを繰り返す日々が続きました。面談は 7 月末に終了し、ほぼ毎日大学の図書館に閉館まで通っては修士論文に取り組み続けました。

修士論文の題名は “I was not a hero”: Martial Masculinity and Trauma in the works of Fountain, Powers and Walker” (「俺はヒーローなんかじゃない」: ファウンテン、パワーズ、ウォーカーの作品群における兵士の「男性性」とトラウマについて)としています。この修士論文では、戦争そのものは概念的に男らしい、とされるも歴史や政治の文脈によって大きくその「男らしさ」が姿を変えること (Kimberly Hutchings)、「兵士」の表象は、白人労働者階級、異性愛、階層移動、プロパガンダなど、あまりに多くのものを示す不安定な概念であることを踏まえ (Megan MacKenzie)、それぞれの小説に合わせて “The Hero” (「英雄」 - 『イエロー・バード』 *The Yellow Birds*, Kevin Powers, 2012), “The Adonis” (「アドニス」 - 『チェリー』 *Cherry*, Nico Walker, 2019), “The Patriarch” (「一家の長」 - 『ビリー・リンの永遠の一日』 *Billy Lynn’s Long Halftime Walk*, Ben Fountain, 2012) という軸を作りつつ研究を行っています。戦争や兵士を「男らしさを身体や命を賭してまで発揮する場所」、「男らしく家族を守るアメリカン・ヒーロー」として定義する時、物語の語り手でもある兵士たちは「男らしくあれ」とアメリカ社会から文化的に成文化された過度の期待に晒されることとなります。そのとき、PTSD、悪夢、フラッシュバックなどといった「トラウマ」がどういう関わりにあるのかということについて個々の作品ごとに論じています。そのうえで、この語り手たちが最後にどのような決断を「イラク戦争」に対して行うのか、「トラウマ」と「兵士らしい男らしさ」の相関から論じています。また、論の深化の上で、指導教官のコメントやフィードバックから、「ジェンダー・パフォーマンスティヴィティ」ジュディス・バトラー、「覇権的男性性」レイウイン・コネル、「感情の政治学」サラ・アーメッド、「ホモソーシャルティ」 「男同士の絆」イヴ・セジュウィックなど精神分析 (フロイトの「不気味なるもの」「ナルシシズム」「偶像化」やラカンの「鏡像段階」「主体 / 客体」など) 政治学やフィルム・スタディーズなどを踏まえて研究を行っています。面談の時に提出した草稿とはかなり方向性が変わり、当初調べる予定ではなかったことが論の深化上必要になってきたり、難解な精神分析学や哲学書の丁寧な咀嚼、そして論への採用と、とにかく時間をかけ丁寧に 1 つずつ論を練っています。

イラク戦争を扱う文学はその題材故あまりに射程範囲が広いと、政治学、文化批評、カルチュ

ラル・スタディーズ、ディサビリティ・スタディーズ、ジェンダー・スタディーズ、精神分析学など
実に様々な学術分野と向かい合わなくてはなりません。それ故、ただやみくもに先行研究を採用する
のではなく、あくまでテキストの分析のために適材適所を見極め、自分の言葉での論述を踏まえ
えでの文芸批評が必要不可欠ですし、その実行を心がけています。時間がかかりますし、全然研究が
進まず孤独感を感じスランプに陥ることもしばしばでしたが、「無理をせず、ただアイデアを書き続
ける」という指導教官からのアドバイスを胸にひたすら修士論文に向き続けました。また、同じ学科
で修士論文を書いているフラットメイトたちとストレス発散に、互いの修士論文の話の聞いたり、コ
ーヒーブレイクをしたりするなど、周りの環境にも大いに助けられました。



(僕の修士論文の指導教官となってくださった Dr Bryan Radley (ブライアン・ラドリー博士) との 1 枚)



(僕のフラットメイトたちとの1枚。全員同じ学科で修士課程に在籍していましたが、インド出身の Krish は自身の出身地区の地域映画についての研究 (MA Film and Literature)、カリフォルニア出身の Nikita は騎士道ロマンスを中心にした中世文学研究 (MA Medieval Studies)、僕自身は 2010 年代以降の現代アメリカ文学研究、と学生の興味をそのまま自由に指導して頂ける研究科でした。)

2. 現地ロータリークラブとのかかわりについて



(画像は“Dragon Boats”の様子です)

7/10 に、市の中心を流れる River Ouse にて開催された York Rotary 主催の“Dragon Boats”の運営に参加致しました。“Dragon Boats”とは、Yorkshire (イングランド北東部の地方の総称です。主要都

市としては York だけではなく Sheffield や Leeds があります)の会社や団体の皆様が、指定するチャリティ団体 (がん研究センター、フードバンク、子どもの学習支援など)といった慈善団体に寄付して参加するカヤックボートレースのことです。募金も合わせて行い、イベントの総利益として約£80000を挙げることができました。

朝早くから夕方まで通して開催され、チャリティ団体の特徴から参加者の皆様がどのような仕事をしているのか、どのような目的でこのチャリティイベントに参加し、どのような奉仕活動を目指されているのかとても興味深かったです。収益は参加団体それぞれの指定するチャリティ団体に寄付されます。市のチャリティの構成や裏側を窺うきっかけにもなり、市が今危機に本している事柄は何か、その一端を覗き見ることができたように思います。



(奉仕活動への参加にあたって全てをサポートしてくださり、本当にお世話になった York Rotary の Sheila Weatherburn (シーラ・ウェザーバーン)さんとの 1 枚です。

また、Sheila さんだけではなく、現在 York Rotary 会長 Mary Lumley (メアリー・ラムリー)さんや前会長の David Fotheringham (デイヴィッド・フォザリングム)さんなどをはじめ、York Rotary の皆様には何かと気にかけて頂きました)

3. これからの予定

9/12 に修士論文を無事提出し、これから帰国に入ります。修士論文そのもの、そして学位の最終評定が出るのは少なくとも 11 月の半ばなので気を揉む日々が続きます。不安で押しつぶされそうな日々の連続ではありましたが、走り切ったことに安堵の気持ちがあります。コロナによる制限で何か

と不自由があったり、動きが制限されたりとままならない日々でしたが、目標の 1 つだったこの留学を達成できたのも、広島中央ロータリークラブの皆様やカウンセラーの西川済様のおかげです。本当にありがとうございます。

次回でのレポートは最終報告書となりそうです。留学を改めて客観的に振り返り、自身の目的の達成度、ロータリー奨学生として何を学んだか、これからどのような目的へと向かっていくのか、後進の奨学生の方々に向けてアドバイスなどをさせていただければ、と思います。

今後とも宜しく願いいたします。